台湾における中国語教育の略史及びその現状

陳　玉明*

畑村　学**　訳・解説

A Brief History and current status of Teaching Chinese as a Second Language in Taiwan

Yu-Ming Chen
Translated by Manabu Hatamura

1. はじめに

最も早い外国向けの中国語教育【補注1】は、海外に移住した華僑のために準備された。北宋朝以降、東南アジアに移住する華人が大幅に増えたことも、その土地で中国語教育が盛んに行われるようになることを促進した。明朝の末には、非常に多くの宣教師たちが布教のために中国語を学び始め、ラテン文字を使用して音を表記し、西洋人が中国語を学ぶ上で有益なたくさんの書物を著した。中国語の学習は、ここから新たな方法を有するようになり、その影響は現在まで続いている。

ここ数年の「漢語熱」（中国語ブーム）は、おそらく 1978 年の大陸中国の改革開放の後に生まれたものであるが、台湾の「対外中国語教育」（海外向けの中国語教育）は 1950 年代にはすでに始まっていた。世界中に中国語教師がどれほど多くいるかはわからないが、比率的には少ない台湾の中国語教師も多くの肯定的な評価を得ており、なかには台湾人の教師しか雇わない機関もある。その理由は何か。

本報告では、最初に台湾の中国語教育のこれまでの発展の歴史を紹介し、続いて中国語教師の資質、教材、教授法等の観点から台湾における中国語教育の現状を見ていくことにする。

２. 近代における台湾中国語教育発展略史

ここで言う「近代」とは、1949 年から現在に至るまでを指す。近代台湾における中国語教育の発展は、以下の主要な出来事からうかがい知ることができる。

（2019 年 1 月 11 日受理）

*台湾国立台中教育大学
**宇部工業高等専門学校　一般科

（1）1956 年に国立台湾師範大学の国立国語センター【注1】が創設され、台湾中国語教育の扉が開かれた。

（2）1970 年代に大学の教育推進部が中国語教育センターを開設し、民間の塾も続々と開設され、外国人が中国語を学ぶための道が開かれた。そうしたなか、1972 年には民間組織である「世界華語文教育協進会」が設立され（1997 年には「世界華語文教育学会」と改称【注2】（一般に「世華会」や「華文会」と略称）、1977 年には第１回の中国語教師研究会を開催し、中国語教育の雑誌や定期刊行物を次々と出版、定期的に国際中国語教育の学術学会を開催し、大陸中国と台湾の学術交流に努め、台湾の中国語教育の発展に重要な役割を果たした。

（3）1995 年、国立台湾師範大学は「華語文教育研究所」の修士課程を開設し、中国語教育は新たな学問分野となった。2003 年以来、政府は大学に中国語教育に関する部署を設立し、専門の人材を育成することを奨励した。

（4）2002 年には、「台湾華語文教学術学会」【注3】（通称「台華会」、ATCSL）が設立され、発起人は百人を超える中国語教師の他、当時の台湾の全大学の中国語学科、中国語センター、塾も含まれる。学術雑誌の定期的な出版に加えて、毎年開催される学会や国際学術会議には、世界中の中国語教育の研究者が参加する大きな行事となっている。

（5）2003 年に第１回「華語文能力検定測験」【注4】が行われ、これは TOCFL テストと略称で呼ばれる。外国人の中国語学習者のために作られたもので、このテストで中国語のレベルを測定する。2006 年にはコンピューター化された最初のテストが行われ、現在、台湾の北部・中部・南部および海外の 26 ヶ国で行われている。

（6）2006 年、教育部は「対外華語教学能力認証考試」【注5】を実施し、この試験に合格することが、外国人に中国語を教える専門的な素養を備えているとした。 大学を卒業し、中国語、漢語言語学、中国語教育、中国社会文化の筆記試験と、中国語会話と表現の口頭試問が必須である。この他、第二外

国語の合格証明を取得しなければならず、これでやっと認証を得られるのである。

(7) 2013 年より、教育部は大量の人員と物資を投入し、「華語文教育産業輸出大国に向けた 8 か年計画」【注 6】を推進し、その実現のために次の 7 つの目標を立てた。

1. 中国語教師育成の中心となる機関を創設する。
2. 中国語教育機関の能力を引き上げる。
3. 海外の中国語学習市場を開拓する。
4. 専門の中国語能力テストを普及させる。
5. データベースと標準システムを確立する。
6. 中国語実体とデジタル教科書を開発する。
7. 台湾での中国語学習を促進する。

今に至るまで、「華語教育産業輸出大国に向けた８か年計画」は進行中である。2016 年には「世界華語教育特別事務局」（通称「華辦」）が創設され、「華語を学びに台湾へ」と「華語を世界に発信」の 2 つの重要な目標を広める役割を担っている。これも、現在台湾の中国語教育が努力を注いでいる点である。

大陸の対外中国語教育はやや遅れてスタートしたが、その発展は極めて速い。ここに簡単に紹介する。1978 年に中国の三中全会【補注 2】が改革開放の推進を決定して以降、北京語言学院は、外国人留学生の四年制現代漢語学部の専攻を創設し、その目的は中国語教師、翻訳者、研究者の育成にあった。1984 年には、中国は「対外漢語」という新しい学科を作った（2014 年に「国際漢語教育」に改称）。1985 年、北京語言学院は第１回漢語水平考試（HSK）を実施し、1986 年に北京語言学院に対外漢語教育の修士課程が創設された。1987 年には「国家対外漢語教学領導小組辦公室」を創設し、通称「国家漢辦」と呼ばれる（現在は「国家漢語国際推広領導小組辦公室」【注 7】に改称）、対外漢語教育を指導する仕事を取りまとめ、「孔子学院」を管理している。1990 年、『対外漢語教師資格審訂辦法』【注 8】を公布し、試験に合格した者は「対外漢語教師資格証書」を得ることができる。

3.台湾における中国語教育の現状

今、まさしく発展中の台湾の中国語教育は、どのような様相を呈しているのであろうか。以下、教師、教材、教育現場の 3 つの点から見ていくことにする。

3-1 中国語教師について

(1)教員養成

台湾の初期の中国語教師は、その多くが英語科の卒業生であり、中国文学科の卒業生もいたが、2005 年頃になると、多くの大学で中国語教師養成クラスが開設されはじめ、大学の中国語学科も増え、現在の中国語教師養成の中心となっている。2018 年 10 月末までに 20 の大学が 31 の中国語学科あるいは中国語課程を開設し（下表）、中国語教育を専門とする人材の育成を目的に、広く台湾や海外の学生を集めている【注 9】。

学校教育制度	開設校名
博士課程	国立台湾師範大学、国立清華大学（学部横断国際博士課程・学位コース人文クラス）
博士学位コース【補注 3】	国立政治大学
修士課程	国立台湾師範大学、公立高雄師範大学、国立台北教育大学、国立台中教育大学、国立中正大学、国立台東大学、輔仁大学、開南大学、中原大学、文藻外語大学
修士学位コース	国立台湾大学、国立政治大学、国立清華大学、国立暨南国際大学、国立屏東大学（学部横断国際修士課程・学位コース中国語教育クラス）、台北市立大学、文化大学、銘伝大学
学士課程	国立台湾師範大学、国立清華大学、国立聯合大学、国立台東大学、国立金門大学、銘伝大学、開南大学、中原大学、文藻外語大学

しかし、各大学の教員も優れた者とそうでない者とが混在しており、そのため、民間にも業界で有名な先生が開くワークショップがあり、また、自然発生的に組織された読書会のグループもあり、これらすべてが中国語教師の専門性を引き上げる上で大きな役割を果たしている。

(2)教師の特色

中国語教育の現場の要求に応えるために、大学の中国語学科や中国語教師を養成するクラスはもちろん、養成される台湾の中国語教師も、みな専門知識における要求は高く、凡そ語彙、文法の知識、外国語教育法の知識と実際の演習方法は、すべてその要求のなかに含まれている。特に、簡体字、繁体字、注音【補注 4】、ピンインはいずれも熟練することが求められ、大陸中国と台湾の発音の違いも理解しなければならない。

(3)職場の分布

大部分の中国語教師は、国内の中国語センター、塾、インターナショナルスクールに職を求めるが、教育部や僑務委員会等が提供する海外派遣の機会に申請する教員も非常に多い。海外で教職に就く場合、政府はある一定の保障を提供しており、教師を受け入れる学校側も相応のサポートを行っている。2017 年には 224 人の中国語教師と 101 人の助手が海外の学校で教職に就く際に上記のサポートを受けた。また、自分から職を探しに海外に出て行く教師もおり、数としては少

なくはないが、どれぐらいいるか把握するのは難しい。

中国語を担当する教師の他に、教材を編纂する者や、各種の計画の実施に協力する者、行政の仕事や教員養成のシステムに参加する者（大学で教員になったり、教員養成の講師になったりする者など）も多い。

目下、台湾の中国語教師が教えることができる場所は、大体大学付属の中国語センターと個人の塾に分かれており、現在国家の認定を受けたところが 64 箇所、申請中が 10 数箇所ある。これらの機関では、教師が必ず「対外華語教育能力認証」を取得していることを求めているが、この認証を持っていることが必ずしも教職につけることを示しているわけではなく、中国語教育の職に就くための入場券を手に入れたと言うに過ぎない。

学期毎に開かれる中国語の授業以外では、近年、外国から短期の団体学生が増え、そのため様々な中国語キャンプ【補注5】が増えている。特に夏休み期間中は、一時的に中国語教育の人材が不足する窮状となり、多くの者がまだ「対外華語教育能力認証」を取得していない学生のうちから中国語教育の現場に出て行く事態となっており、現場での教育の質は大きな試練に直面している。これが現在の台湾の中国語教育の隠れた悩みである。

3-2 教材方面

現在使用されている中国語教材の種類は徐々に増えており、華僑のための教材、外国人学生及び新住民のための教材に大別できる。

(1)華僑を対象とした中国語教材

華僑をサポートするため、また海外で中華文化を継続するために、この種の教材の発展はすでに歴史が古い。過去に国語（中国語）教師が編纂した母語教材は多く、各国の言語によるテキストが整い、言語と文化をカバーし、華僑はそれを無料で手に入れることができる。例えば、『500 字中文』『中華文化教材』『初中華語』『高中華語』『成語故事』等のような教材は、非常に包括的で、かつ母国語の教育に近い。しかし、華僑の三世、四世の誕生に伴い、華僑の子孫は徐々に第二外国語を学ぶ学生に近づき、そのため 2017 年には、第二外国語教材に類似した『学華語向前走』が時に応ずるように登場した。この教材の国別、言語別のテキストは、文化や国情に配慮し微妙に内容を変えることで、世界中の華僑の要求に応えている。

(2)留学生を対象とした中国語教材

過去の中国語教室では、『実用視聴華語』か『遠東生活華語』のいずれかが使用され、その他の教材は種類が少なく、媒介となる言語はすべて英語であった。『今日台湾』と少数の塾が自ら編纂した教材にのみ、日本語版があった。過去の教科書は、話す、聞く、読む、書くのすべての能力の習得を目的とした総合教材であり、中国語を長時間学習できる留学生に適しており、順を追って着実に学習することで優れた学習成果を上げることができるものであった。もし教材が授業に向いていなければ、教師はたいてい自分で教材を作っていたのである。

2015 年頃からは様々な教材の出版が増え、読み、書き、話す、聞くを網羅した総合教材である『当代中文課程』は、ひとたび出版されるや市場シェア第一位を獲得した。2018 年に 6 つの大学が協力して編纂した『時代華語』は、「華語文能力試験」の検定基準を満たすと宣伝している。この他にも、異なる国々の学生のための教材や、読解力や会話力を向上させるための教材、短期留学のグループや長期留学生や交換留学生向けの教材等が次々と出版されており、こうした様々な用途に応じた教材の出版は、現代の台湾中国語の様相が益々多様となり、百家争鳴とも言える盛況ぶりを示している。

(3)新住民の教材

過去 20 年の間に台湾の新住民は大幅に増加した。結婚して台湾の新住民となったこれら外国人にとって、中国語の学習は間違いなく差し迫った問題である。 しかし、新住民のための教材の種類は依然として非常に少なく、長い間、時代が変化するにも関わらず更新されることもなかった。その上多くの新住民は台湾語を学ぶ必要があるが、関連教材は微々たるものである。この点はさらに開拓しなければならない領域である。

3-3 教育現場

中国語教師が教育の現場で作り出す学習の様相は、恐らくは台湾の中国語教育が世界で常に一定の地位を得ている原因であろう。 以下、３つの方面から台湾の中国語教育の特徴を見てみる。

(1)活用する教授法

恐らくはアメリカの語学教育の啓発を受け、台湾の中国語教員は、一般的に活動主体の教授法を尊重し、様々な外国語教育の方法を柔軟に運用して、詳しく説明して多く練習させ、学生に対して多様な教育と評価を採用し、異なる年齢の学生の心身の発達に合わせて、それに相応しい教育活動を設計している。

よく用いられる教授法には、直接教授法（ディレクト・インストラクション）、全身反応教授法（トータル・フィジカル・リスポンス）、暗示教授法（サジェストロジー）、多重知性の応用教授法（多重知性には、言語的知性、論理・数学的知性、視覚空間的知性、対人的知性、身体運動感覚的知性、

音楽的知性、内省的知性、博物学的知性）がある。教室では常に学生が歩いたり、歌ったり、リズムを取ったり、競技をしたりしており、様々な教材が机の上、床の上、壁に溢れている。教師が講義し、学生が聞いたり書いたりする伝統的な授業は、現在の台湾の中国語クラスではめったに見られない。恐らくは中国語が大変難しい言語であることから、もし気楽で面白い方法で学習しなければ、学生はすぐに途中で諦めてしまうかもしれないのである。

この他、中国語教師の間には、口コミで広まったいくつかの教育のルールがある。例えば、言語学の用語を使わない、学生には教師よりも多く話させる、できる限り中国語以外の言葉を話さない等で、いずれも学習効果をさらに良くするための方法であり、台湾の中国語教師にとって普遍的な方法となっている。

(2)教育媒体

現在、大多数の台湾の中国語センターでは、ピンインと繁体字をセットにして授業を行っており、わずかに新住民のクラスや少数の中国語クラスでのみ注音と繁体字とセットにして授業を行っている。もし海外で教えることになれば、簡体字とピンインを教えることを要求され、発音の標準ですら台湾とは異なるこうした現実の環境の制約は、台湾の中国語教師の基本スキルを一層向上させることになった。しかし、状況がこのようであるために、外部の環境がいかに変化したとしても、台湾の中国語教師は心配する必要はないのである。

台湾の中国語センターでは、ほとんどの教室にコンピューター、プロジェクター、オーディオ機器が装備されており、ネットワークもスムーズである。そのため、中国語教師にとっては非常に便利で、自分の力を存分に発揮することが可能である。教室には多くのマルチメディア教材が導入され、パワーポイントを使うだけの授業は一般的で、新奇性のないものに変わり、教師はスマートフォン等のデジタルツールを使って即時に学生と双方向の交流が可能となった。「Kahoot！」「Charades！」「Plickers」等がそうしたツールであり、学生の管理も「Google Classroom」「Seesaw」等で簡単に行うことができるようになった。かつて、ある教師が、「現代の学生はインターネットの回線を口に銜えて生まれてきた」と言ったが、そのような学生を満足させる学習スタイルを採用するために、教師は教育技術の向上に努めなければならないのである。

(3)クラス経営の重視

台湾の中国語教師は、とりわけクラス管理を重視しており、それぞれの学生の学習状況、心身の状態に注意を払い、教室で様々なスキルを使って学生が学習に集中できるようにしている。恐らく学生は異なる文化背景のところから来ており、年齢さえも異なっていることから、教師はカリキュラムを順調に進めなければならず、クラス管理は教師が備えるべきものの中で重要な課題となっている。最近、どのような研修に参加しても、常に教師から「差異化教育」【補注 6】の話題が出され、「差異化教育」のカリキュラムについて論じさえすれば、すぐに研修の定員がいっぱいになるほどである。このことは、教師がクラス経営に非常に多くの時間を割いていることを物語っている。

以上要するに、台湾の中国語教育の現状は、喜ばしい点もあれば、いくつかの懸念事項もある。政府は一貫して「量的な進歩」を求めてきたが、幸いにも筆者が観察してきた現象は「質的な進歩」を求めるものであった。質的な進歩があって初めて根本から量的な進歩をもたらすことができるのであり、このことが台湾の中国語教育が、中国語教育全体の一角を常に担うことができる要因であると信じている。

4.結論

中国語教育の世界に足を踏み入れてから 11 年、筆者は立ち止まることなく中国語教育に関する知識の習得に努めてきた。時には国際的な大きな環境が、小さな国の小さな民【補注 7】である我々に甚だ不公平であることを嘆くこともあったが、こうした困難な状況が、自分自身に絶えず鞭打って進歩させ、棘の道の上に我々が歩んで行く道を開かせたと言える。「漢語熱」（中国語ブーム）は、まだ熱いままの状態であろうか。しかし、これはすでに我々の主要なテーマではなく、我々の使命は「道を伝え、業を授け、惑いを解く」【補注 8】という教師の天命を今後も継続し、最適な方法を用いて美しい中国語を伝え、学生たちに優れた学習成果を上げさせることである。これこそが我々が提示する台湾中国語教育の姿である。

解説　畑村　学

本報告は、台湾国内や海外でユニークな中国語教育を実践する陳玉明氏による、台湾中国語教育史の概略および現状に関するレポートである。

陳先生の中国語の授業は、中華結びや線装本作りなどの文化活動と中国語教育をミックスした極めてユニークなものであるが、テキストの出版作業にもスタッフとして参加し、本報告のなかでも紹介されている『時代華語』に執筆者として関与もしている。

訳者である畑村は、2014 年 9 月末から翌年の 1 月上旬にかけて、台湾中部の苗栗県にある国立聯合大学に国立高等専門学校機構の在外研究員として滞在した。主たる目的は聯合大学と勤務校である宇部高専との学術交流協定締結に向けた

準備作業と、協定締結後の具体的な交流活動に関する交渉であった。

滞在中、当時劉若緹教授が主任を務める華語文学系（華文系）に研究室を用意してもらい、華文系の先生方や学生たちと親しく交流したが、なかでも本報告の著者である陳先生を中心に運営されていた華文系付属の華語文中心（中国語センター）には毎日のように通い、本校学生の聯合大学での中国語研修実施に向けて日々議論を重ねたのである。

聯合大学での研修が終わる数日前には、陳先生に誘っていただき、ドイツを拠点にワークショップ型の中国語教育を実践する蒋葳先生のワークショップにも参加した。音楽を利用したり、身の回りの日用品を使ったりと、蒋先生のユニークな中国語の授業は、本報告で陳先生が詳細に述べている台湾の中国語教育の最先端を行く独特なものであった。私はこの時の経験がきっかけとなり、台湾の中国語教育にはまっていくことになる。

私は中国語教育の専門家ではなく、ましてや最近まで中国語を教えたことすらなかった。中国語の語学力も日常会話ができる程度で、大学院生の頃に1年間、中国の南京大学に国費留学した経験はあるものの、就職後、中国語を話すような機会はこれまでほとんどなかったと言ってよい。

その私が台湾の中国語教育に親しみを抱いたのは、台湾の中国語の授業が、私が学生の頃に受けた中国語の授業と違い、学習活動が中心で、学生が楽しんで授業に参加できる仕組みになっていること、そうした学生の活動を中心に据えた授業を理想的と考え、私自身高専の国語でアクティブラーニング型の授業を実践してきたことが大きいように思う。教えるものは違っても、授業の中心は学生の活動にあり、教員の解説は目的を達成するための一ステップであって、授業の中心にはなり得ない。活動主体の授業は教室を活性化させ、学生の知識やスキルの定着に大きな効果があることは、体験的にすぐに理解できたからである。

広島でのワークショップの様子

2017年1月22日には、学内の競争的資金を活用して陳先生を日本に招聘し、「アクティブラーニングを取り入れた中国語教授法ワークショップ」（広島市 RCC 文化センター）を実施、高専や大学、高校の中国語教員や将来中国語教員を目指す大学院生が30名近く集まった。

また、2018年9月21日には、岡山市内で陳先生の講演会「台湾華語教育の現状と概要」を開催、本報告はその時の講演の内容がもとになっている。その後9月22～24日にかけて、津山高専（岡山県津山市）において、第4ブロック高専第二外国語合宿（中国語と韓国語を実施）を開催、中国語に関しては陳先生に講師を依頼し、高専生及び一般市民約20名を対象に2泊3日のアクティブラーニング型中国語の授業を実施していただいた。その実践は、まさしく陳先生がこの報告書の「教育現場：活用する教授法、教育媒体」で述べているような手法がふんだんに取り入れられていた。なお、高専生を対象にした陳先生の授業が、我々中国語教育に関わる高専教員の研修を兼ねたものであることは言うまでもない。

第二外国語合宿での中国語授業の様子

本報告にもあるように、外国人に対する中国語教育の世界で台湾の中国語教育が占める数的な割合は、確かに微々たるものであろう。外国人に中国語を教える教師のほとんどが大陸中国の出身者であり、台湾が中国に肩を並べようと思っても、その圧倒的な数に太刀打ちできるはずもない。

しかし、こと中国語教育の手法に関して言えば、大陸の中国語教育には無い、もちろん日本の中国語教育にも無い独特の発想と工夫に基づいたユニークな実践が行われている。

日本の教育現場では、様々な科目の授業に学生の主体的な学びであるアクティブラーニングを取り入れる傾向が強まっているが、中国語教育の現場では、依然として多くの教室で文法事項の説明を中心とした旧来型の授業が行われている。本報告で陳先生が紹介している台湾の新しい実践を、積極的に授業に採用し、中国語教育を活性化させたいと考えている。本報告は、その第一歩となることを確信している。

参考

1 台湾師範大学国語センター https://mtc.ntnu.edu.tw/
2 世界華語文教育学会 http://www.wcla.org.tw/
3 台湾華語文教学学会 http://www.atcsl.org/
4 華語文能力測験 https://www.sc-top.org.tw/
5 對外華語教学能力認証考試
https://depart.moe.edu.tw/ed2500/News.aspx?n=D6C383FCEBE5343C&sms=EA01A381F204F203
6 邁向華語文教育産業輸出大国八年計画
https://depart.moe.edu.tw/ed2500/News.aspx?n=E0F2A9154F4E577A&sms=81A49C23F4C8A193
7 国家漢辦：http://www.hanban.edu.cn/
8『対外漢語教師資格審訂辦法』
http://www.chineseteacher.org.cn/
9 中華民国教育部 106 学年度大専院校一覧表
https://ulist.moe.gov.tw/Home/Index
10 通過評鑑，核准境外招生華語文研習機構
https://depart.moe.edu.tw/ed2500/News.aspx?n=B9C5E550F0D6C668&sms=141E0BD754235129
11 僑委会全球華文網 https://www.huayuworld.org/

訳者補注

1　「中国語教育」の「中国語」とは、英文タイトルに「a Second Language」と言うように、第二言語、すなわち外国人や海外で暮らす華僑が学習する対象としての中国語を指しており、大陸の中国人や台湾人が母国語として習得する中国語ではない。

　なお、台湾では日本人が一般的言うところの中国語のことを「華語」といい、大陸では「漢語」という。本文中、基本的には我々に馴染みのある「中国語」と統一した呼称を用いるが、固有名詞として用いられる場合や、使い分けるのが妥当と判断した箇所に関しては、原文のまま「華語」

2　5 年に一度開催される中国共産党大会で選出された中央委員と、中央委員候補らによる 3 回目の党中央委員会全体会議のこと。中国の針路を決めるもっとも重要な会議の一つとして注目されている。

3　原文は「博士学位学程」。「学位学程」は、在籍する学科の教員だけでは学位を出す人数が足りていないため、別の学科の教員も合わせた形で作られたコース。通常の博士課程と同様にここで学位を取得できる。修士学位学程も同様。

4　中国語の発音記号の 1 つで、主に台湾で用いられる。全部で 37 文字あり、冒頭の四文字「ㄅㄆㄇㄈ」の発音から「ボポモフォ」（bopomofo）とも呼ばれる。

5　キャンプは、原文では「営隊」。・一般に、宿泊を伴った様々な短期の研修を指す。

6　Differentiated Instruction の台湾での呼称。アメリカのキャロル・トムリンソン（Carol Tomlinson）博士が提唱する生徒の多様性に応じたクラスでの指導を指す。

7　原文は「小国小民」。台湾の民主活動家・鄭南榕（1947-1989）の有名な言葉で、「我們是小国小民、但是我們是好国好民」（我々は小さな国の小さな民であるが、優れた国の優れた民である）とある（『鄭南榕獄中日記』）。

8　唐代の文人で唐宋八大家の 1 人・韓愈（768-824）「師説」にある言葉。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP18K00818「理系学生用オリジナル中国語教科書に即したアクティブラーニングの開発及び事例集作成」の助成を受けたものである。